



大岡 元岡 徹太郎 編輯
 政談 村井長蒼調合机
 五編 中

873
14



873
14

873
14

大岡政談 村井長菴調合机卷之十四

東京 元岡維則 編次

第二十七回

悪謀敗て兇徒巢穴を失せ

愛に惚きの母十と噂る博徒、小存場の三次が近頃の酒友は。三次も
種々の不慮さへ、麹町の辺其身の評定を悪くせしより。殊に長田も
土浦を救され、風説を傳へれば家も取方付て又元の無宿者と成
り。この費十が家に折と痛涙を為り。然るに費十は三河屋丹助を田舎
親に見せし。面悟も引取、敗者の拂ひを與へて、同ト放蕩兎共
二人と連き首魁より一挙動し、其存に今酒食と成り。三方金の拂
ひとあがるより。あつらひに打擲され同業と共に幸く橋場の匠に

大岡政談卷之十四

一

辰米堂藏版

立返り男共とて足腰と按摩せむとて侍の二人の老若も商議せむに
お柱がまゝ築方あつて憤り丹助に仇せん技計と勧め此年控を
肩うぐと論をまぬ貫十身に横着るも仇せんと思ひ止まらん
と為しりども同業の家名を難く竟に三人の老若云に任せ仇せむ企
とぞおしはる。去らば何ぞと巧むとて腹愈為るも此目三次も居合
けむ先頭末と語り和も共其力を添呉よと只管に頼たり。三
次で終つて云極博徒を合手に争論まゝ限り知らせぬ白濁若
おれ我のいふ定めぬ浮浪人の身の上仇と為らん御歳守も何り成
に云んぬに終して大勢家に押入り家業の法器雜具を踏毀破し
ても老若に控を掛け幾許の腹愈と為ん主柄とて逃退る。原も

家々有らざる神く師の如き甚良痛む交交も或は倆にお面を割
此身為呆せんいもの内に有ると腮反して笑ひ語り。麻七控を郎あんど
とる博徒等。二次ぐ云交妙計あり。貫十を勧め同業を誘ひ集めり。
一夜石に押しんといひ貫十お点頭はに於て意に二個の博徒等を
呼集め。歴七控を身も又四五人の同業を集め束つ。都合十名を絶りりか。
去らば母の人数を以て。二河屋の店に乱入。尽く法器雜具を毀破し控を
ひ成を老若らばお柱にんにも苦を言ふ。明日の夜を更におてより。押しんを
做らば用とて成たり。爰に鈴吉と云べる魚賣子有り。丹助が家の
婢婦。奥野が兄あつた。昨日今戸橋場の辺を商う。不圖貫十が家の鄰
る家に生寄り。控を口に懸掛居る。博徒等との相譚成を。尽くせり。

二丹助に遠恨有る梅子反中も妹の主人あまは聞捨に成し難しと云ふ
に此交を主出咄々米澤里に多り先づ丹助に達て少區赴を告げぬ
何ある事故の起しと問に丹助は若干等が暴挙の企有るを聞たり。
甚ど警り具に喧嘩の起原を物語り如何に防衛を為んと高儀
あめ経書云梅子這奴等原より江村の輩強く徳まにやるは西身に
あまと受け居る我字が日高人漢河津の人と相多有るに赤や斯
時の助けおと皆今日の内に集め柜の高儀成り又赤心に居たりん
にい我今より頼知の徳を為んと老實に云ぬ丹助心決し言葉に迫りぬを
殆吉魚養と店の傍へに押方付け。遽しく深川の辺を走りぬ丹助氣早
の性あまをみて目下の者を惠むる厚く。殊に知に位居し一年計りかゝる

出入の大小工甚外青物波世の人々も一づの金を借るも有り病中
を救はし一恩を蒙るも有り。聞傳たる響五名忽地に馳入り皆清
肘と博徒等と闘争せん志ざると合入。折る程にうた吉深川の
漁師七名を將り運り我夜顛末を物語つて。程に有志の人々も及ば
回乃せしむたり。有難に漸く商談して。宜あまを勇まの七名漁夫と昔に
間の中に座と品も丹助力を借て老脱り大方かき有合酒有と云して集
り入と答を。兎れ入の智計と彩むくも。入進と申梅運取寄
来り十分はまを。其恥妨を見引捕。江中へお河に在るふ為る事
に無程あして。後患の患ひ来じて。事と迷ふ。時時若中梅子計といふ金
謀。知はし。宜しといふも。我思は元々頼の徒りの苦勞に頼。福の

事も省じ。此方より相中。道途に待伏して。這奴を赤松。池田を
 其方。這奴を赤松。池田を其方。事終らん。家に引更九押入んとて。敵あり
 脱先。池田を赤松。池田を其方。強敵一方。さうさう。我見は
 這奴寺が勢の鼻を折れた。如く。思ふこと。ぬ。在中。竟に。這奴寺が
 寺。可しく。地の利を計つ。夜も。暗に。關事も。な。け。さ。答。丹
 助。入の。心。合。な。と。密。な。ら。威。膽。を。冷。ま。し。追。押。ひ。ぬ。ま。う。ぬ。ぬ
 お。救。も。這。に。奇。刻。な。る。卷。動。い。な。り。ふ。ふ。と。南。海。漸。く。決。り。た。り。時。の
 夜。入。を。密。り。て。極。子。を。標。し。め。愈。々。せ。ま。る。に。連。ひ。あ。ぐ。ば。謀。り。し。め。く。に。ぬ。ん。と。
 この。夜。入。と。家。に。留。め。ぬ。實。主。共。に。救。れ。と。破。け。て。這。奴。の。く。に。寝。に。就
 ま。す。夜。の。心。を。待。たり。り。暫。く。有。て。夜。の。明。渡。り。日。光。赤。に。登。ま。り。而。し。

起。出。く。竹。本。の。は。物。を。准。備。し。揚。場。の。極。子。を。獲。り。し。た。今。入。金。有。佛。報
 知。と。傳。せ。り。ま。ら。ば。後。ま。る。内。は。方。り。押。し。入。を。致。す。其。身。に。及。び。け。は。
 集。金。一。人。々。十。名。名。前。り。店。先。や。丹。助。主。に。能。く。事。を。守。り。其
 我。々。十。分。を。果。せ。ぬ。ん。と。這。奴。を。お。て。池。田。等。八。頭。り。勇。ん。で。出。り。ぬ。り。夜
 一。天。陰。陰。つ。く。寸。他。も。な。ら。ず。人。の。り。来。も。自。ら。あ。か。り。ぬ。り。里。の。ま。強。く
 患。ひ。あ。ぐ。し。と。闘。争。思。ふ。が。候。あ。り。と。さ。う。な。ら。ば。敵。人。漁。ま。り。に。引。り。敵。々
 皆。流。乃。平。定。者。あり。と。刻。と。い。ふ。殺。し。て。川。中。に。投。入。し。と。聞。つ。早。今。を。揚。場。の
 境。と。も。に。陰。謀。り。入。々。と。判。り。貫。十。が。家。ま。ぐ。一。間。も。な。り。は。思。ひ。埋。伏。し
 店。々。人。と。思。ひ。入。ら。せ。又。折。茶。動。を。探。ら。ん。と。云。に。者。を。指。揮。不。信。の。思。ひ。に。家
 の。後。方。或。は。其。の。後。に。思。ひ。陰。謀。り。中。に。二。人。の。漁。師。陰。謀。を。常。回。と。敵。し。あ

のひびく音十ヶ家の軒下に三内の桶子と云ふせに討母千が當りた彼の
 土居の澤もあききく目も成り成り己は家と押出さんとするおろし入は
 けきる二個の老とえり情を懸掛て人をあつては救あさく結むは
 方ハ氣ある二個の海軍物ともぞ唯の掛つて重宝に倒し推す持
 と振揚り腰の傍りと懸いおち救もいこを丹助が架の老あを海軍の
 押事巻物と推すつて一巻物めづく思ひ懸く運ああり是情とて高
 へくはと目下二次歴七等さうらに声と揚げ押事るといふ余知らざる白痴を
 れ手始めにさうと擲し救せし掛ひ尖に指圖をなせし者喚ひくさうら
 に二人作つて逃中へ向くも何方の埋伏せし遠すを引出ぬは合よりや
 冷きいなる揚ば観ありども事なりたり子と出合らへくは目下を桶子と竊ひ

居一埋伏の仕度寺竹本と推し一々変たり解き出せ平も土居方
 情流し何方より追取巻物さふお救せし聞けは情流しは弟を付して尋
 ら慌て逃に那と出く救多人救あさくは各團へ氣の張も掛け救れを逃
 せんさうらと推しに合はる荒田兎の海軍物踏込々々逃る老と救々に
 叩きささく引紐で捨り倒し男を修下お擲さし土居の目分人をあさく
 たりと地はと海軍物の何方と推し集めて逃の後にさきひ毛より音十ヶ家
 に押せんて救團かり情流し等し團合十ヶ家あり身倒し休たる回音と掛け
 て放たはぶ揚と逃さる後い出合あ一人も有る是に柱の中を母千が家
 へり外より目の桶子と見ると一人も居らざる仰と向うを推し送
 ぬる是限のく救とてさうら最も救あさくを住居さるる再びあせす老

有べうらむと竟に二統の入々と勃めは場と躍りに引揚人中を云ぬ面を若く向ト。
まらへるげと速くおまにさゆる者勇と勇んと河原の家に入り登り
生中にもはれどもとて一息を丹助に向つてお命に物渡り銭を
指さす。おまにさゆる乃男をお抱へて我ら引籠りて人を揺下倒しはあね
乃首を斬りて幾個お呉たりとてお物ゆも勇と声言に迷へ
り。今おまにさゆるお殺さんをお心にか減しはるるお擲きりて強念を去り
他て傷死二個もはるる丹助もさ驚あやに為果せぬとお殺ひさつて
拭きおまにさゆるの汗を拭き有振丹助もお身をゆすて大に安堵。後初は人二
人と殺す。後患の種を三日お出さしとておち婢女に中知り。鮮魚珍香と
懸く酒宴を催し大に人々をわびらひり。また三ツ六伏櫓の多人殺に

出合ひ計りしを業にお違へりね暗さと幸に速くはあ傷と逃れまう今
戸も三谷橋にお山の宿の町さうりして大付盛成改めのおまにさゆるは
お小吏の密に見詰めし。お先に目加ち。常日お女にア捕へてお知らせ
む。おまにさゆるお先の之を強逼つて捕りて他府有女を公せり引倒して繩
とを掛り。お小吏も自ら首を懸けり。お先三次を情中と改めむ。
に腰掛の隙よりおまの長十五寸ある短刀一口出さる。お小吏其短刀を素問ふ
て次詞を巧みにおまに夜中用心の為に隠し持てり。お小吏叱りて曰く。
汝用心にこそ又物と扱合ひ照方とぞ。お小吏其言を情中に隠し持た疑
ふ可との一ツ。殊更おまにさゆるおまにさゆる何に似せし者か。長短と伴
り。おまにさゆるおまにさゆる。おまにさゆるおまにさゆる。おまにさゆるおまにさゆる。



手先

手先

三助

大岡政談巻之十四

八

聚楽堂蔵版



闘争の場
を脱走し
二次捕縛
逃ふ

大助の
丹助の
橋の
助の

浅草山之宿町

役人

下僕

大岡政談巻之十四

聚楽堂蔵版

身體の自由あるを和らむ。對治と廢せしむ。理感せしむ。有るに況合
 めつそ。月様は更夜して。徳の方を流りける。強し。若無の。費千が。心定と。知
 り。方ひ。情も。打撲も。命一。若有と。いへ。も。身體。未だ。自由。ある。が。安ら
 成。一。難。と。三。海。と。居。食。一。居。け。し。世。千。第。一。の。一。付。と。案。下。
 我。体。計。して。合。策。に出。る。と。云。ふ。事。當。を。進。して。世。目。と。い。ふ。は。法。也。と。
 自。ら。退。き。さ。る。邊。界。の。上。に。坐。り。計。つ。固。り。無。ん。と。俄。に。衣。類。雜。具
 の。直。接。者。も。思。ふ。六。曲。物。も。若。知。して。密。に。他。の。家。に。隠。れ。於。て。活。計。術
 まで。今。の。才。先。に。出。る。由。を。示。し。單。が。の。強。に。知。者。有。り。け。し。は。地。を。却。き
 て。六。七。日。の。目。と。送。り。り。斷。り。會。客。一。居。た。る。情。徒。も。十。日。二。日。と。經。過
 と。送。ら。さ。る。と。云。ふ。者。商。談。也。一。コ。ハ。我。れ。と。を。進。ま。し。め。一。と。程。後。と。い。ふ。計。策。

知。り。て。思。ふ。一。も。心。を。破。れ。二。世。を。身。一。見。し。下。一。と。是。り。費。千。が。侍。と。考。へ。て
 進。退。あり。未。だ。窮。乏。も。云。ふ。事。も。更。に。解。脱。の。家。を。探。り。守。り。今。此。法。器。成。す
 の。由。と。文。を。借。り。移。り。強。り。有。難。具。有。限。り。を。賣。拂。つ。原。米。の。料。に
 當。り。も。餘。り。氣。色。あ。く。ま。進。退。を。活。居。たり。多。少。進。出。せ。費。千。を。括
 折。播。り。に。早。十。日。を。経。に。け。し。也。會。客。等。果。累。す。と。云。ふ。は。此。多。か。ら。ん。と。
 福。り。大。元。を。回。算。一。總。て。家。に。返。り。ん。に。コ。ハ。如何。に。家。内。の。雜。具。強。り。有。る
 五。徳。金。の。類。と。五。五。の。疊。の。と。也。他。の。何。可。も。我。後。亦。も。思。ふ。と。云。ふ
 有。格。且。會。客。の。元。元。の。ゆ。け。づ。人。も。退。く。も。面。を。保。び。一。向。も。去。る
 云。根。杖。杖。也。也。見。る。が。帰。定。者。一。か。し。と。一。れ。活。計。の。術。に。於。た。る。六。元
 ら。も。也。家。内。の。雜。具。を。何。て。か。賣。拂。ひ。又。此。後。の。密。を。の。密。借。り。て。程

始り余を愛する人暴く似て直一かじと決り費す感念一和をいふ
 理有り秋心も叶なり世の如く為ん物終り家も今より九方背ん
 とまへハ野を即こよりりと歩くと覺するさうさうと氷のりハ程程さう
 とも昔かうぞも二つが捕縛さう一ハ同士の悪を我のいふ
 ことと連累に達する者も一刻もさうと隠す小如くさうさうと
 かねた人の積金首尾能く果さうとさうとさうと先考南り
 の取たて人の積金首尾能く果さうとさうとさうと先考南り
 老を便りおん、況し一ハ残り少升の雜具とさうと賣物さうと亦三
 名の女が家とさうとさうと男の令と才先匠さうとさうと以波して
 さうと梅場の四巻さうと最又さうと千位の取さうとさうとさうと

第二十八回 負商の好意病夫窮危を免る

名所や水鏡ある隅田川流る梅場の片ほるる木の間に渡り月終と共
 小傾く藤屋の園ハ繁葉と萩芒山吹風に散る花を喜まや身さうと
 が屑鏡掲げさうとさうと家も由有人の住居さうとさうと
 るも何れも朝霧ら腐り壁落るおさうとさうと
 ていを渡らん世の浮沈と窮達も皆天命といふさうとさうと
 ち。さうとさうと物さうとさうと吾身も斯うと便さうとさうと
 さうとさうとさうとさうと見倒一男を家業の平生鳴呼さうと
 さうとさうと乃疲高要なりと喘息吻さうとさうと福さうとさうと
 下りて老を眺むさうと二個の雄喃を其さうとさうと和さうとさうと

一ツ有止^ひまき^つと見^みて^りの^まと。以^も之^を以^も之^を久^く入^りを^も掃^き蕪^を種^の肉^に入^り。娘^もと^もに^肉に^入つ^く。こ^ろに^推に^片膝^おり。お^の家^の中^を見^みて^は母^が殿^も二^枚屋^風を^と廻^し。高^脚ち^を半^時の^田舎^取娘^の父^とも^あめ^べ。瘦^れ籠^ひく^骨の^まま^く咳^く逆^り苦^けげ^た枕^辺に^ある^茶燭^前ら^引き^て湯^茶を^吞居^り。惣^を終^り押^入り^取出^したる^一幅^乃掛^りの^久八^がお^り摺^入出^で。こ^の昔^{より}家^傳り^有る^品が^希父^がお^の病^着に^おの^時令^もま^ま。胸^をか^く背^に懸^けの^好末^丈に^走踏^の有^限り^を置^きく^まと^箱も^出し^開け^ば久^八は^手に^掲げ^く。展^見し^と六^雲村^が馬^とた^る。秘^系山^水の^草馬^{あり}。見^終り^て元^の如^くに^巻納^め。ま^結掃^{ある}一^軸傳^り物^と有^て名^のり^もま^ま。若^村の^筆蹟^{あり}。高^金に^有ぐ^侍も^と。逆^も肩^を我^々に^及ぶ^ま。高^見と^あら^まの^病も^人も^有り^て中^にに^對候^らる^挿子^何り^まと^推乃^お。品^と並^に引^きつ^るま^は。ま^まの^眼も^を解^り易^き湯^合の^毀損^と故^器の^不用^物或^は古^佛を^捨て^り乃^破ま^類百^結の^掲り^お。布^の集^めの^何が^かお^り有^んか^ん。握^りま^まと^筋は^六娘^の殿^鼻た^る面^を揚^げ明^し。ゆ^りの^恥も^去ま^ま。海^會に^也の^云候^も當^り。妻^ら乃^に被^る衣^類も^秋知^る相^方下^さつ^身を^かけ^たる^衣。夜^風も^おに^被ら^ま。拈^りま^まも^眼乃^前若^まお^り。ま^まの^目に^遠る^もも^まの^りめ^婆。ま^の物^の乃^他の^當物^の有^りせ^ば河^がめ^掛合^ぬの^掛物^と見^せつ^る。雪^解乃^孫の^山田^路を^踏く^の手^をお^の

高^金に^有ぐ^侍も^と。逆^も肩^を我^々に^及ぶ^ま。高^見と^あら^まの^病も^人も^有り^て中^にに^對候^らる^挿子^何り^まと^推乃^お。品^と並^に引^きつ^るま^は。ま^まの^眼も^を解^り易^き湯^合の^毀損^と故^器の^不用^物或^は古^佛を^捨て^り乃^破ま^類百^結の^掲り^お。布^の集^めの^何が^かお^り有^んか^ん。握^りま^まと^筋は^六娘^の殿^鼻た^る面^を揚^げ明^し。ゆ^りの^恥も^去ま^ま。海^會に^也の^云候^も當^り。妻^ら乃^に被^る衣^類も^秋知^る相^方下^さつ^身を^かけ^たる^衣。夜^風も^おに^被ら^ま。拈^りま^まも^眼乃^前若^まお^り。ま^まの^目に^遠る^もも^まの^りめ^婆。ま^の物^の乃^他の^當物^の有^りせ^ば河^がめ^掛合^ぬの^掛物^と見^せつ^る。雪^解乃^孫の^山田^路を^踏く^の手^をお^の

俗に心も付くを付く。と申すは、我々の家の高小僧の格
 も定まり。さうして、男も其の毒く。三引丸もその日のふに
 るんと思惟あり。娘に向つて、愈々様は是非あきらむる事ごとく、眼の
 厚さる、仔細の事。吾儕返り、目利に違せ。道真に商賈
 一。間も直りせし付ひ味つ。情く、女壺の引丸と入せやせん。免
 も有る。暫一の因壺。はらん。捲簾の因。金。遂に解け。紙
 煙色。ト東中。て括擽る。先。に擽る地炕の火烟草の煙も。消の菊の
 燃は。焚付。娘の傍り。取方付け。捲簾。核の間。は。の痛と。そ。らん。穿
 物脱て。擽り。と。動。お。病。ま。久。と。見。と。掛。ま。は。居
 る。商賈。入。心。の。信。あ。は。始。め。後。達。も。あ。の。扇。買。人。の。風

習に似て、和蘭の割と、存意の深き人あり。吾儕を見拂て、粧。及。事。の。ゆ。が。
 夢。入。て。た。つ。や。た。の。苦。小。さ。な。種。の。み。も。氷。さ。と。ま。へ。と。久。ハ。ハ。兼。て。乃
 氣。質。不。便。の。み。ど。と。男。ひ。け。は。病。床。を。進。ま。り。時。ぬ。り。付。方。も。な
 け。と。ど。も。に。成。る。ば。種。の。ゆ。れ。に。付。て。も。あ。ら。ま。へ。我。等。も。あ。り。の。扇。買
 かな。と。聞。り。ま。一。名。運。に。違。ひ。快。一。と。あ。る。れ。ど。も。淋。々。と。の。種。活。ひ。た。る。
 せり。商賈。最。ち。一。見。ま。ら。ま。る。に。ゆ。め。も。並。と。た。ぬ。不。運。の。仕。法。あ。い。と
 地。生。も。あ。方。と。も。ま。え。く。を。他。心。り。あ。ま。せ。一。人。偶。も。わ。づ。ら。ひ。の。有
 て。不。自。由。の。事。の。ま。り。幾。許。の。中。に。後。な。らん。倅。ら。び。諸。り。見。た
 ま。へ。と。ま。る。温。床。に。同。尋。ぬ。ま。い。病。の。娘。に。技。記。ら。ま。り。漸。に。床。の。と
 に。起。ち。り。あ。ま。る。扇。風。ト。捲。や。り。救。回。噴。逆。と。噴。き。落。座。なる。眼。を

狭客が為
に両持徒
髪のと
別落さる

大岡政談卷之十四

十五

辰水堂藏板



のら十

樽
去



字九郎

かりき

燈
ち
弁

大岡政談卷之十四

辰水堂藏板

志をたがた猶有くおぼろ梅の窓しらす如く吾儕我子の江戸生とに
 を以て娘の杉木しらすの吾儕が名ふ子太郎とて他国もなき越後
 雪の山國つらうてあるそのはれも甚密なる博平の直に生をしし獲
 農丈にひが将が為にすまの家産とを以て失せしむる向の果に敢て
 死残る我と娘の二人耕作も種のお畑をなすは州をてはの江戸へ
 越えしし抑まて年の夏殊も今て人あふせし甲見有て十年の昔も
 うしはの東歌く狂聞りまう。後使客と成なるの中心に掛く雲州うと
 我子の縁乃落くるは今にそを娶もて掛く。白ともわぬ高のゆき
 旋く遠きとも思ひ残るまを今も不使のほほは只娘の身乃りしを
 もまもかる人ぞ今もまをまはの地へ流し来り。惟と使りに世と流

らん只世むらうく息者。田一夜遠び改ての妹が母のを我より彩と思
 ひ獲るすやうして死せんぬ。如るに掛居ると湖の空を如何にん
 和後白とんけの江戸中をまのり入る。流世をわがまのの町々知り居て有る
 まんまのほまはく使客の使居をすやうなる方う。今人々に因て
 我子のの術を回を歌く思ふ。二日の日に涙を平日に心掛て去る意
 ねらう。ハ雲が一雲ねあす事も有るん。吾儕が彩とて云つ。吐息
 わたる有振るすやう久く悲然たる面を揚げおも華をさす。月のと我
 法の方を哭あひて。序々に河舟をかまは。舞まをるぬ。いね。ね。目
 的乃今い。雲も。も。力。大丸の心あり。浅草と。う。神田と。う。方
 角乃知。し。う。救。回。の。區。因。と。雲。わ。見。ん。た。う。う。う。早

木は冷方か、寧ろ返つて希死に向かひおのせさる情海も人もあつて、
 りを人に命をさむむまはれたらうと、おののに敵り、まに鏡かま
 を母平の風更あつたらうぞと、瀧々流く患ひ死む体になんと思ひ、
 奮然始りて、命を南東やせよ、行ふの友交もあまきまを、
 尋ねる便もあつた、一はひ懸むまを、
 病體は、
 陰を、
 極日との習せ、
 邪に思ひ、
 故是の、

せざる、
 志ん、
 わい、
 征社、
 り、
 の、
 控、
 ん、
 の、
 溜息、

情は續きつて思ひ居るに本心との二箇の情は連も激を
 法なき者づも。形も運命に成りも因縁かさん油も涙の意は作
 し情の罪場へて愛なき者も成さう。後今更しく人おもせよ。
 汝が心根のあはれ。又仕合に違事者も。屈らぬおき。連く休
 よ。と涙も耐むまゝ息はつてもおろる。おれも。物も。要さう。と
 に。情けるおれ。日影の雲に。移さう。心根も。痛い。と。う。う。う。
 久八は。終る宿所に。返り。情々。に。思入。極。せ。つ。對。候。と。思
 の。ま。つ。り。病。は。る。親。と。叔。母。と。ある。娘。ぐ。ら。の。考。あ。ん。百。倍。一。つ。と。思
 に。ま。つ。り。若。き。翠。翠。室。に。凝。粧。梳。も。成。ら。ず。て。新。林。の。中。に。夜。夜。夏
 流。ぐ。は。先。へ。極。換。ある。人。が。ん。を。ま。い。不。夜。さ。よ。及。て。時。日。の。日。夜。ぬ。や。そ。

飲。衆。が。見。か。り。バ。状。子。の。使。合。は。と。思。し。疎。く。考。て。思。は。ん。と。心。に。汗。つ。と。思
 ぬ。と。思。し。一。睡。の。後。思。さ。る。早。く。と。考。方。必。死。に。あ。る。と。思。し。令。め。ぬ。ぬ。が
 久八は。日。夜。世。を。休。と。思。て。二。箇。と。思。し。を。南。東。の。打。柱。に。身。づ。く。ら。ひ。し。
 生。自。可。に。思。ひ。ぬ。ま。す。と。思。し。八。時。昔。の。二。箇。を。再。ね。極。に。思。ふ。使。合。の。二。名
 か。ま。ば。家。も。ぬ。か。し。久八は。門。へ。つ。と。之。に。對。面。を。成。す。先。子。の。却
 と。若。て。知。名。を。信。者。と。思。ふ。と。思。し。使。合。の。人。と。同。く。ぬ。が。情。者。に。あ。り
 ぬ。と。思。し。情。を。傾。け。し。情。は。我。知。名。に。あ。り。ぬ。等。の。故。有。と。舊。名。と。思。ひ
 ぬ。と。思。し。不。審。く。ぬ。が。久八は。死。情。中。より。お。れ。未。か。ま。ぬ。と。思。は。る。片。紙。を。中。
 樸。名。圖。も。常。実。の。つ。と。思。し。を。物。流。り。と。思。し。尋。ね。異。と。思。し。お。れ。子。の。人。に。親
 中。れ。ぬ。り。と。思。し。如。此。と。思。し。五。甲。の。物。流。り。と。思。し。情。者。に。あ。り。ぬ。等。

日示久八が源切かると言射く。然て其の間に伴ひりき。鮮魚と花
 下珍味とぞ。羨海とめつ。餐魚最も心を酔しぬ久八始めく雲
 ねあふと。お管に悦び示地八の中核移りて。暫く池あねをる。若
 物地八もすく久八志しと感下。好意宿所と問尋ねつ。已に酒酣た
 りりけき。八八膝能申して。母吉く向ひ云。梅は私言が大切なる。若
 父の大病を。速く尋ねて。攻て。今生は。専念し。後の事。こと同
 ひ。治りし。安んじ。ば。必令病治せ。遂に。さき。旅路に。赴き。とも思
 疎き。安んじ。なりん。弟。今。より。き。満ち。ぬ。さ。さ。や。う。男。と。愛。り。居。る。
 我。親。族。に。害。し。人。有。り。て。好。い。も。悪。し。今。さ。も。送。り。と。と。元。是
 ね。ま。が。後。夜。中。り。形。も。も。作。り。通。し。に。戸。の。直。接。を。知。り。色。バ。形。と。

親子に苦勞なる。あまも。ま。ま。を。入。り。居。り。泣。き。下。り。懇。せ。世。務。さ。ま。よ。
 吾。儂。金。の。さ。も。力。ま。さ。下。格。柄。へ。交。知。ら。隔。り。て。不。便。得。り。は。金。百
 の。内。も。ま。の。ま。日。前。に。引。移。り。し。も。元。を。ま。に。在。り。て。能。く。看。返。と。る。ね。
 然。も。た。り。力。を。座。り。ん。と。悦。み。痛。せ。し。義。氣。者。も。男。の。活。ぞ。金。と。伝
 義。の。活。き。久。八。お。管。に。感。懐。し。ま。に。使。任。の。格。別。の。志。者。り。我。も。一。日
 商。法。を。体。と。し。り。格。柄。の。事。向。と。る。ん。形。ま。さ。さ。の。へ。や。と。に。如。下。身
 ぬ。り。ん。や。と。過。き。お。も。ま。ご。一。夜。客。者。馬。路。道。終。り。に。速。く。ひ。え。こ。ハ
 我。も。志。の。應。答。を。に。傾。け。り。と。と。救。回。並。と。久。八。に。お。め。珍。者。地
 と。倉。に。送。り。し。眞。際。に。体。け。ま。り。地。八。射。刺。軍。り。と。暫。者。と。傳。り。い。サ
 久。八。も。お。管。の。難。目。も。有。り。ん。然。も。か。を。信。ひ。及。び。せん。と。自。ら。ま。さ。

いそ流石の氣弱婦志氣多きと踏張るも落さず尻に落ちる侍に落着
 夫に吐く元が云付るを守念をうけたはる念せ培はる婿の妹と脱け付るは誰か
 丸出を發別にも念せある念せ砥擧り片小舎より利り強めはる婿の終始最
 田々侍と別居共惚つて揚つて扇と扇と災禍受はるやの二個案
 今道心名の物化三片の念しと念しと念しと投付と一色と豊牛
 元てお初に細先お初に別して丸増と毛とお初と求めて六折もは
 と云ふ者おんアナ忌と一色の因縁勝とあげ玉の末お初と頼冠
 野老弟お初となど引替へお初と海見送りお初とととと逃りたり

大岡政談 村井長菴調合札巻之古

